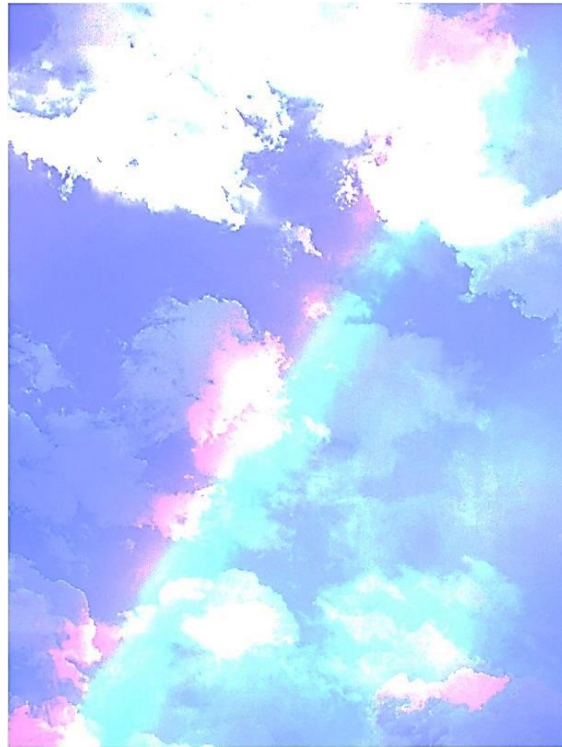


**日本医療催眠学会 第三回 学術大会**  
**医療催眠の今後の展望に向けて**



**日時** 2015年9月27日(日)  
**会場** 東京大学 本郷キャンパス内  
東京大学医学部附属病院 中央診療棟2  
(東京都文京区本郷7-3-1)

**主催** 日本医療催眠学会  
**大会長** 萩原 優(はぎわら まさる)  
イーハトーヴクリニック 院長

Japan Medical Hypnosis Association.

**JMHA** 日本医療催眠学会



ご挨拶

皆様のおかげで第三回の本学会の学術大会を迎えようとしております。催眠の素晴らしさを知り、また、催眠に関心のある方々の交流の場でもあります。今回の発表も多岐にわたり、催眠の奥行きの高さとダイナミックさを味わえる企画となっております。

本学会の会員の方はもとより、催眠に関心と興味のある方はどなたでも参加できます。多くの皆様方のご参加をお待ちしております。

第三回 日本医療催眠学会 大会長

萩原 優 (はぎわら まさる)

イーハートヴクリニック 院長

日本医療催眠学会理事長

## プログラム

8:45 開場 ～ 受付

9:00～ 9:10	萩原 優	第三回大会長挨拶
9:10～ 9:50	中島 勇一	「逆転移を利用する」
9:55～10:35	志賀 一雅	「脳と無意識(催眠)・・・脳波観察による推論」
10:45～11:20	中川 角司	「感情が体感ごと即座に消えて楽になる役立つ手法『ゼロリセット』」
11:25～12:10	藤野 敬介	「デーブ・エルマン誘導法」

12:10～13:15 ……昼休み(理事会)……

13:15～13:30	学会総会	
13:30～14:20	光田 秀	「エドガー・ケイシーのリーディングと催眠現象」
14:25～15:05	加藤 薫	「催眠、マインドフルネス そしてその先へ」

15:05～15:20 ……休憩……

15:20～16:00	田崎 美弥子	「依存症に対するニューロフィードバックトレーニングの有効性の検討」
16:05～16:20	紫紋 かつ恵	「潜在意識下での“死の体験”が生み出す意識の転換」
16:20～16:35	横地 真樹	「小児の催眠療法」
16:45～17:30	宮崎 ますみ	「母子の絆を深め魂の尊厳を守る催眠療法『ヒプノ赤ちゃんメソッド』」

18:00～20:00 懇親会(事前申込)

連絡先 : 日本医療催眠学会 事務局

所在地 : 〒225-0002 神奈川県横浜市青葉区美しが丘2-18-9 ニューライフビル202

TEL: 045-902-7240 FAX: 045-482-7620 学会HP : <http://japan-mha.com>

## 「逆転移を利用する」



中島 勇一

(なかじま ゆういち)  
全米催眠療法協会  
認定講師

### 【概要】

逆転移とは、クライアントの抑圧している気持ちが、気づかぬうちにセラピストの無意識に侵入して、その気持ちに乗っ取られている状態です。セラピストが感じているその気持ちが、実はクライアントのものだと気づいたとき、乗っ取られていた状態から、共感へと変わります。同じ気持ちを感じてくれる、心強いラポールに支えられて、クライアントはその気持ちを受け入れていきます。

### 【抄録】

従来セラピストは逆転移を起こさぬよう、中立の立場を求められてきましたが、クライアントとセラピストが出会うと、逆転移は必ず起きるものです。セラピーの重要なテーマは、クライアントが抑圧した気持ちに向き合い、それを受け入れて自我に統合することです。そこには2つのポイントがあります。1つめは、どんな気持ちを抑圧しているのか、を見つけることです。2つめは、それを受け入れる気持ちになってもらうことです。セラピストが逆転移に気づくことで、クライアントの抑圧している気持ちを見つけることができます。クライアントが向き合いたくないから抑圧した気持ちは、そのままでは受け入れることはできません。でも、セラピストが感じているその気持ちが、実はクライアントのものだと気づいたとき、乗っ取られていた状態から、共感へと変わります。同じ気持ちを感じてくれる、心強いラポールに支えられて、クライアントはその気持を受け入れていきます。

### 【プロフィール】

1956年生まれ。全米催眠療法協会認定講師。1998年、日本人初の全米催眠療法協会認定講師となる。以来、ヒプノセラピスト養成スクール(株式会社日本メンタルヘルス研究所主催)の指導に当たり、現在までに指導した生徒は、東京・名古屋・大阪・福岡・仙台・札幌を合わせて約1200名。《著書》〈メディアアート出版〉『癒しのヒプノセラピー』『こころの力が広がるとき〜 無意識からのメッセージを受け取る ヒプノセラピー 〜』

## 「脳と無意識(催眠)・・・脳波観察による推論」

### 【概要】

脳の情報処理は電気的に行われていて脳波の形で観測することができます。意識が支配的なときは10Hzの $\alpha$ 波や12Hzの $\beta$ 波、ときに14Hz以上の $\gamma$ 波が支配的になります。ところが意識が低下した催眠状態では7.8Hzの $\theta$ 波が優勢になり、右脳と左脳、人と人としてシンクロ現象の起きることが実験的に確かめられたので報告します。

### 【抄録】

幼児の脳の情報処理はどのような刺激でも喜びを感じずるように仮配線されているらしく脳波は7.8Hzの $\theta$ 波が優勢であると報告されています。経験を積み学習すると機能は複雑になり右脳と左脳、意識と潜在意識に分化され、脳波も10Hzのミッド $\alpha$ 波から12Hzのファスト $\alpha$ 波へ、さらに複雑な $\beta$ 波が支配的になりストレスが鬱積するものと思われます。新皮質の発達が脳波を周波数の高い方へシフトさせて複雑にしたようです。そのことは文明の発達に寄与しますが、健康維持の自律機能が抑制されてしまいます。

そこで、どのようにしたら7.8Hzの $\theta$ 波が強くなるかを調べたところ、自律訓練法の第6公式を行っているときや瞑想で意識を手放したとき、ヒプノセラピーを行っているとき、歌や演奏などで感動したとき、氣功法やヒーリングなど、右脳と左脳、人と人が7.8Hzの $\theta$ 波で強く共鳴し合っていることが分かりましたので報告します。

### 【プロフィール】

日本において最初に脳波の「アルファ波」を3種類に分け、ファスト $\alpha$ 波、ミッド $\alpha$ 波、スロー $\alpha$ 波と質的な違いを提唱。1961年電気通信大学卒業後、松下技研に勤務。東京大学工学部計数工学科研究員を兼務しながら、脳波研究に没頭。83年脳力開発研究所設立。パソコンを利用した脳波分析装置を開発し、大学や企業の研究所へ提供。 $\alpha$ 波を指標としたメンタルトレーニング指導で、日本航空、日本IBM、NTTなど、大手企業の脳力開発研修において高い評価を得る。2008・2009年文部科学省より委託を受け「専門学校教職員、学生の為のメンタルヘルス・脳力開発プログラム」を開発。その後、学校や企業に向けた「メンタルウェルネストレーニング推進プロジェクト」を総合監修。2011年3月に米国HHS(米国防務省)大統領諮問機関より、長年に渡る脳波とメンタルトレーニングの研究、実践に対しLGOLD AWARD(金賞)を授与される。現在も電気通信大学の研究員として最新の研究に従事している。



志賀一雅

(しが かずまき)

(株)脳力開発研究所  
相談役

## 「感情が体感ごと即座に消えて楽になる役立つ手法「ゼロリセット」」



中川角司

(なかがわ かくじ)  
マザーシップ代表

### 【要旨】

ゼロリセットは、自分で自分の感情を即座に消して、楽な状態に解放される画期的な手法です。気を紛らわす等ではなく、苦悩の体感ごと消えて無くなります。

2013年、私の目の前で妻が突然死しました。その翌日から行っている手法であり、私は奇跡的に3ヵ月後には全ての悲嘆が消え、通常のメンタルに回復しました。その時点から、感情で苦しんでいる人様にこの手法をお伝えするようになり、今では沖縄県外からもセミナーに呼んで頂く機会が増えています。

セミナー受講者のほぼ100%が、感情が消えることを体験して下さいます。速攻性とシンプルさを持つ手法で、どなたでも即座に使えますので、ストレス社会においては、とてもお役に立てる手法であると確信します。科学では解明できていないものと言えますが、実態として楽になります。医療現場等でも活用されることを願います。

### 【プロフィール】

中川角司(なかがわかくじ)マザーシップ代表

1962年生まれ。セラピスト(個人セッション2300件以上)、グリーンケアカウンセラー、産業カウンセラー、ヘルスカウンセリング学会マスター課程修了、コーチング技法/傾聴技法/プレゼン技法講師、ゼロリセット手法伝道師

著書:『宇宙生命論』『沖縄聖地巡礼』、ポリシー「一人ひとりが楽に生きることに貢献したい」

## 「デーブ・エルマン誘導法」



藤野 敬介

(ふじの けいすけ)  
催眠療院 銀枝庵  
OHTC 東京  
國學院大學准教授

### 【概要】

「デーブ・エルマン誘導法」とは、アメリカの伝説的催眠療法士であるデーブ・エルマンによって開発された催眠誘導法です。いわゆる古典催眠の誘導法の粋を極めたとも評されるエルマン誘導法は、特に臨床催眠の現場で多用されています。この誘導法は日本では認知度は低いのですが、NGHやABH等のアメリカを本拠とする催眠団体の講座では必ず修得が義務付けられる大変重要な誘導法です。

### 【抄録】

デーブ・エルマンは、イボリット・ベルネームの著作等からインスピレーションを受け、それまでに古典催眠で一般的に行われていた漸進的分割弛緩法よりもはるかに短い時間で催眠誘導を行う方法を開発しました。それはわずか4分ほどで、被験者を「ソムナンビュリズム」と呼ばれる深いレベルのトランス状態へと導くことのできる、簡単で確実性のある誘導法でした。エルマンは医師や歯科医に対してのみ催眠を教えていましたが、ソムナンビュリズムを臨床催眠のベースとなる催眠の深度として定め、そこから更に開腹手術を麻酔無しで行なえる様なエスデイル・ステートへの深化法や、催眠分析という心理的問題の根源を探る療法を指導していました。本発表では、この誘導法の誕生の経緯を説明した後、実際の誘導のデモンストレーションを行います。

### 【プロフィール】

催眠療法士。1970年東京都生まれ。催眠療院・銀枝庵(ぎんしあん)院長。カナダの大学を卒業後、日本の大学院に進学。博士課程修了後、防衛省・防衛大学校にて英語を指導。長い海外生活の経験から、呼吸法等を通じて英語の発声・発音を修得する「身体から学ぶ英語」を提唱。同時期に操体(法)の修行を開始。國學院大學へ移籍後、操体のエッセンスをベースとした英語の指導を開始。その頃、うつ病と摂食障害を抱える学生から相談を受けたことをきっかけに、心理学、精神医学を研究しはじめ、催眠療法を知る。数年に渡る催眠療法の研究・修行の末、大学において教育催眠の研究を、催眠療院・銀枝庵にて催眠療法の実践をしている。

## 「エドガー・ケイシーのリーディングと催眠現象」

### 【概要】

20世紀前半に米国で活躍したエドガー・ケイシー(1877 - 1945)は催眠状態において驚異的な心霊現象(リーディング)を発揮した。この講演では、ケイシーのリーディング能力と催眠現象との関わりについて報告するとともに、人間の霊的可能性を探求する催眠療法の可能性について検討する。

### 【抄録】

エドガー・ケイシーは深い催眠状態に自らを導く能力に生来的に恵まれ、催眠状態にある間は、自分に向けられたどのような質問に対しても、驚くほどの情報を与えることができた。彼の前半生においては、その能力はもっぱら難病人の診断と治療法の処方にも活用されたが、後半生においては、依頼者の過去生についての情報を与えたり、質問さえ適切であれば、どのような分野の質問に対しても有用な解答を与えられることが見出された。ケイシー没後、ケイシーが難病治療に対して与えた情報はまとめられ、今日「エドガー・ケイシー療法」という名で認知されるようになっている。この講演では、エドガー・ケイシーがどのように催眠状態に入り、そこでどのような情報もたらされたのか、また、現時点で理解されているリーディングのメカニズムや、それらの情報が今日どのように活用されているのかを報告する。

### 【プロフィール】

1958年広島県生まれ。京都大学工学部卒業。20歳の頃、ケイシーの『転生の秘密』を読み、霊的人生観に目覚めたことに始まる。大学院修了後、政府研究機関での勤務を経て、現在ケイシーの研究・翻訳・著述・講演に専念する。

日本エドガー・ケイシーセンター会長。

エドガー・ケイシーとは(1877~1945)、20世紀前半に米国で活躍した人物で、目覚めている時は写真業を営む敬虔なクリスチャンでありながら、催眠状態に入ると超人的な能力を発揮し、あらゆる難病に対して診断と治療法を与えることができたり、あるいは魂の記録(アカシックレコード)を読んで、依頼者の長所や短所、才能や弱点などを過去性をもとに解き明かすことができた。



光田 秀

(みつだ しげる)  
NPO法人日本エドガー・ケイシー  
センター会長

## 「催眠、マインドフルネス、そしてその先へ」



加藤 薫

(かとう かおる)  
心理・教育研究所 グレース

### 【要旨】

心理療法の分野で最近注目されているマインドフルネスと催眠の類似点と相違点を考察します。意識状態に着目すると両者は表裏一体の関係にあり、認知面に着目すると、前者が受容を旨とし後者は再構成を目指すという違いがあります。認知について、さらに言語学的、哲学的省察を加え、マインドフルネスを超えた心理的援助の可能性を論じます。

### 【抄録】

近年、心理療法の分野では、マインドフルネス(意図的に、今この瞬間に価値判断をすることなく注意を向けること)を重要な要素とする治療技法が注目されています。催眠療法との共通点と相違点についてまず考察致します。マインドフルネスと催眠トランスは類似した状態と捉えるよりは表裏一体の関係と捉えるほうが的を射ているようです。また、相違点としては、催眠が言語暗示やイメージを使って思考や感情の変化を目指すのに比し、マインドフルネスでは、思考や感情に対してありのままに受け入れて行く注意の向け方を養うことを目指します。

相違点の中でも、特に思考に着目して思考を形作る「言語」とは何かを改めて考えてみます。言語学や哲学の省察を手掛かりにすると、人間が普通に認識している分化した世界は言語によって作り上げられた仮想現実で、本来の現実世界はひと繋りの未分化の世界です。マインドフルネスを超えてその世界をいささかでも垣間見ることを目指す援助は可能かについて、最後に論じます。

## 「依存症に対するニューロフィードバック・トレーニングの有効性の検討」



田崎美弥子

(たさき みやこ)

東邦大学医学部教授  
臨床ニューロフィードバック協会  
代表理事

### 【概要】

薬物依存症やアルコール依存症といった、依存症は薬物治療もなかなか効果がなく、再発率も高いといわれているが、ニューロフィードバックのアルファ・シータトレーニングにより症状が軽減することが知られている。そのアルファ・シータトレーニングの紹介と共に、実際に薬物依存が軽減した1症例を紹介する。

### 【抄録】

日本における依存症治療では、依存症の対象物を断つことが最も有効とされ、サポートグループにおける12のステップにより回復を図るが、再発率も高く、一度依存症になると、完全に回復することが難しいことが知られている。欧米では、この12のステップの実践に加え、ニューロフィードバックのアルファ・シータトレーニングが適用されている。ニューロフィードバックは1980年代からNASAの研究により始まり、現在、主に欧米で、うつ病、発達障害、脳損傷、癲癇といった疾患や、音楽やスポーツのパフォーマンス向上に適用されている。ニューロフィードバックトレーニングの中には、閉眼時に後頭野に脳波のアルファ波(8-12Hz)とシータ波(4-7Hz)がより多く出現するアルファ・シータトレーニングがあり、これが依存症にも効果があることが報告されている。その方法論の紹介と共に、実際に睡眠薬依存のクライアントに対して適用し、睡眠薬依存から回復した1臨床例を紹介し、その有効性について検討したい。

### 【プロフィール】

慶応義塾大学文学部心理学科卒業、カンサス州立大学大学院人間発達学部博士課程卒業、心理学博士(Ph.D.)専門はQOL研究、応用行動分析学、認知行動療法。IBM大和研究所、世界保健機関本部、東京理科大学大学院准教授を経て現在、東邦大学医学部医学科心理学研究室教授に就任。心理学の分野から、知覚心理学・認知心理学・行動主義・学習理論・対人関係論、発達心理学を概説し、基本的な心理学の基本的な知識と考え方を学ぶ。さらに心理学的ストレスに関わる生理心理学および健康心理学へと理解を深める。それに加え、医学と関連した心理学検査である、SPA(皮膚電位活動)、ロールシャッハテスト、知能検査、その他人間関係、対人コミュニケーションを実習する。(東邦大学HPより)

## 発表「潜在意識下での“死の体験”が生み出す意識の転換」

### 【概要】

たった一度の退行催眠により、その後の人生をがらりと変えるクライアントがいる。これはイメージ下での「死の追体験」によるものが大きいと捉えている。

生きづらさの解消に訪れたクライアントが、催眠によって前世での生と死をどのように体感し、何に気づき、どう向き合い、その後の人生がどの様に変化したか、実際の事例をいくつか紹介します。

### 【抄録】

前世療法を受けることで、その後の人生が変わるのは、死の追体験によるものと捉えています。誰もが必ず訪れる死。いつからか私たちは死を恐れ、忌み嫌うことで更に恐れが増大しているようにも見受けられます。潜在意識下で前世での死の瞬間を経験すると、それが幸せな一生であっても、辛く短い人生だったとしても「いずれ人は死ぬのだ」という大切なことを思い出します。セラピストとしてその死を丁寧に取り扱うことで、クライアントは、死に真正面から向き合うことができ、怖れが幻想だったことに気づきます。同時に輪廻転生や魂の存在への理解を得ます。現在の人生と照らし合わせることで、死を意識した上での、今を大切にすると、逆算した生き方をするようになります。その前世が真実かどうかは関係ありません。今回はイメージ下での死を体験することにより、クライアントの人生がどう変化したのか、事例をご紹介します。

紫紋かつ恵

(しもん かつえ)

シモンヒブノセラピー

## 発表「小児の催眠療法」

### 【要旨】

当院では、平成26年より診療に催眠療法を取り入れています。平成27年5月現在、7才男児(チック)、10才男児(夜尿症)、10才女児(移動する体中の痛み)の3例について催眠療法を施行しました。このうち、7才男児と10才男児の2症例を紹介し、小児における催眠療法の特性や効果について報告します。

### 【抄録】

症例1は、7才男児。頬の突発的で不規則な速い動き、いわゆるチック症状が日に日に増悪するという主訴で受診され、催眠療法を導入しました。大好きな本田圭介選手にでてきてもらい、遊んだり話をしたりしながら、顔の動きの事も聞くという方法をとりました。

症例2は、10才男児。毎日続く夜尿症の主訴で来院。通常の治療では全く軽快しないため、催眠療法を導入しました。自分の膀胱に「ポーコーさん」という名前をつけて擬人化し、話をしてもらう方法をとりました。「ポーコーさん」の紹介で「のうみそさん」に会いにいき、そこでアドバイスをもらったり、解決した未来をみせたもったりと、思わぬ展開をみせていきました。

小児の催眠導入は短時間で済むことや、イメージが湧きやすいという特性がある反面、集中できる時間が短い事や語彙が少ないなど、制約も大きいという事もあります。それでも小児の催眠はとても有用だと感じました。

横地真樹

(よこち まき)

やまびこクリニック

# 「母子の絆を深め魂の尊厳を守る催眠出産『ヒプノ赤ちゃんメソッド』」



## 宮崎ますみ

(みやざき ますみ)

日本ヒプノセラピーアカデミー  
インス代表

### 【抄録】

催眠を用いた次世代の自然出産法『ヒプノ赤ちゃん』は、女性の身体に本来備わっている、穏やかで快適な自然出産能力を最大限に引き出す出産教育プログラムです。本来出産とは、女性が宇宙と地球との繋がりをリアルに体験できる神秘的瞬間であり、子宮の波動運動に自らを明け渡し委ね解き放たれた時、最高のエクスタシーを味わえるものなのです。ところが現在の出産はそれとは真逆な状態へと女性を追い込んでいます。機械的に管理されたシステムの中、女性たちは潜在的に備わっている出産能力を奪われ、無力感と恐怖と不安の中へと放り出され、古くから受け継がれてきた生命の源との深い愛の繋がりを断ち切られた状態で、この優美な分娩という舞を封印されてしまったのです。ではどのように女性の身体に潜在的に備わっている自然出産能力を引き出していくのか、実際にヒプノ赤ちゃんで出産されたお母さんたちの事例も交えながら、その方法をいくつかご紹介させていただきたいと思います。

### 【プロフィール】

1968年名古屋市生まれ。1984年クラウンガールに選ばれ、その後女優として、舞台・映画・TVなど幅広く活躍。1995年結婚を機に渡米。米国で二児の息子を育てながらヨガに傾倒し魂の探求に専念する。2005年に映画活動を再開するも乳がん発覚。帰国し、2年間様々な治療を実践し乳がんを克服。その間に心と身体と魂のバランスの重要性を身をもって経験。その体験から人の深奥には自らを健全な状態へと戻していく大きな治癒力が備わっていることを知る。そしてヒプノセラピーがその無限の可能性を引き出し、人生をより豊かに創造的に生きる手懸りになると確信、ヒプノセラピーを本格的に学ぶ。現在は魂の探求を重ねた経験を生かし、心と体と魂を多角的、多次的にアプローチする自己実現を主軸としたヒプノセラピー(催眠療法)を指導。2007年には厚生労働省・厚生労働大臣より「健康大使」に任命され、国民一人一人が健康の重要性を認識し、積極的に健康対策に取り組んでいただくため、全国各地で講演活動なども行っている。

著書「至福へのとびら」(飛鳥新社)、「ピュア・バランス」(ヒカルランド)

日本ヒプノセラピーアカデミーインス代表 <http://jhtaisis.net> 一般社団法人ホールライフクリエイション代表理事 <http://wholelifecreation.com>  
ヒプノウーマン&聖母の祈り <http://salon.hypnowoman.jp>